

公益財団法人



# すみりんニュース No.40

■編集・発行 公益財団法人住吉隣保事業推進協会  
 ■編集発行人 理事長 友永健三

公益財団法人住吉隣保事業推進協会 〒558-0054 大阪市住吉区帝塚山東5-3-21  
 TEL06-6674-3732 FAX06-6674-7201 <http://www.sumiyoshi.or.jp/>

## この号の内容

1. 「第22回住吉・住之江じんけんのつどい全体集会での講演」報告(1)～( )
2. 「財団からのお知らせ」( )～( )

## ■報告「第22回住吉・住之江

じんけんのつどい全体集会」報告

# 子どもたちとつくる貧困とひとりぼっちのないまち

～子どもの貧困に向き合う山科醍醐子どもひろばの実践～

2014年11月8日(土)午後1時から第22回住吉・住之江じんけんのつどいが市民交流センターすみよし北大ホール等で開催されました。全体集会では特定非営利活動法人 山科醍醐こどものひろばの村井琢哉さんから「子どもたちとつくる 貧困とひとりぼっちのないまち」と題した講演がありました。

以下、当日の全体講演の内容を事務局でまとめたものを紹介します。

なお、全体集会の司会者は住吉小学校の竹原章雄校長先生で、当日の参加者は350名でした。  
 (文責：事務局)

## 開会行事

(司会)

講師のご紹介をさせていただきます。  
 本日は、《特定非営利活動法人山科醍醐こどものひろば》より村井琢哉さんにお越しいただいております。《山科醍醐こどものひろば》は、地域に住む全ての子どもたちが心豊かに育つことをめざし、地域の社会環境、文化環境がよりよくなることを大きな目的に活動しています。子どもと大人が一体となって物事に真剣に向き合うことで共に育ちあいた

いと願いを大切に子育て支援、子どもたちの体験、文化事業、子どもの貧困の対策事業、地域連携事業など日々の活動を行なっております。

全体の講演の資料は、資料4ページから掲載していますのでご覧ください。

それでは「子どもたちとつくる貧困とひとりぼっちのないまち」と題しまして、《山科醍醐こどものひろば》の村井琢哉様より講演いただきます。どうぞよろしく願いいたします。

## 村井琢哉さんの講演

### 《はじめに》

みなさん、こんにちは。京都の山科という場所から来ました《山科醍醐こどものひろば》の村井と申します。本日はよろしくお願ひいたします。

第 22 回住吉、住之江人権の集い開催おめでとうございます。

本当に多くの方にご来場いただきましてとっても緊張している訳ですが、始まる前に先ほど友永健吾実行委員長と一緒にこの町、この周辺を少し歩かさせていただきました。私たちのまち、山科醍醐という地域にも同じような風景が見られます。住む方々の違いがありますが一生懸命まちの中で暮らしている姿は同じだと思っております。そういったことを、山科でやっていることを中心にお話をさせていただけたらなと思っております。

今日お題として「子どもたちとつくる貧困とひとりぼっちのないまち」、としていますが、これは私と私の前に代表をしておりました幸重忠孝の 2 人で書かせていただいた本のタイトルでもあります。

「貧困」という言葉だけ聞くと、先程ご挨拶が様々な方からありましたが、金銭的に苦しいという話は少しずつ日本の中では失われていき、戦前・戦後の本当のみんなが苦しかったところとは少し意味合いが変わってきているかなと思います。でもその中で、ひとりぼっちになっている子どもがいる、子どもに限らないですよ、今の時代。様々な人が生き辛さを抱えられる、そういった中でまちとしてどういう姿になっていったらいいのかということについて、今取り組んでいることをお話しさせていただけたらなと思っております。

一緒に育とうということ、34 年の活動、35 年目になる活動でございます。こういった地域の活動から比べると歴史としたら浅いかもしれませんが少し聞いていただければと思っております。

### 《山科醍醐地区の紹介》

山科という場所は京都市と滋賀県大津市の丁度端境にある小さな盆地の中にあります。山科区と伏見区の醍醐という地域がくっついている、ひとつの盆地の中にある、昔、山科

村と言われた場所になります。もともと京都に都があった場所の東に下った土地でございますので、歴史的な人物のお墓とか重要な人物が暗殺された場所とか隠れ家とかがいっぱいある場所です。大化の改新の中大兄皇子、天智天皇さんとか、中臣鎌足さんとかもそうですし、坂上田村麻呂さんのお墓とか、小野小町の随心院があつたりとかもします。もう少しすると忠臣蔵ですね。大石内蔵助が隠れていた里があるまちでございますし、醍醐地域には明智光秀を暗殺した場所、竹藪があるのが小栗栖(おぐるす)と言われております。そんな若干、歴史的なディープなまちというか、都の影が渦巻いている、そんなまちでございます。

そういう意味では華やかな都の発展のしわ寄せが都の郊外に寄せられていきました。ごみ処理場、火葬場、そして数々の福祉施設はとりあえず京都市郊外に造っておけばいいんじゃないか、土地があるからというような形で造られて都市開発、地域開発がされていったまちでございます。

京都の真ん中の方からすると、昔は山科に嫁ぐだけで「なんで山科に嫁を出さなあかんねんや。」と私の祖母たちは親戚中から反対されたと言われていました。区政としてはもうすぐ来年、再来年が 40 周年になりますが、まだ区としては新しい町でございますが、少しずつ活動を作ってまいりました。

京都も盆地と言われますが、その横に同じようなもうひとつ盆地がくっついてるイメージで上が山科区で、下が伏見区醍醐という場所でございます。伏見区醍醐は公営の団地、住宅があります。醍醐にはぱっと周り見たときにこの地域の 10 倍ぐらい団地があります。市営、府営、UR 都市公社(独立行政法人都市再生機構)です。たくさん団地を造っておられて、そういった団地だらけのまちです。しかも一時にたくさん団地を造って、そこにたくさん外の人たちが住んだので地域としてのまとまりがあまりないまちでもあります。そういったまちなどがこの地域の中にぎゅゅと押し込まれて生活している、ある意味、暮らしのまちでございます。京都、大阪、滋賀で働く方々のベットダウンとなっております。

### 《山科醍醐こどものひろばとは》

そういったところで、1980年、今から34年前になりますけども地域の主婦の方々、特に専業主婦の方々を中心に「地域の子どもたちを支えていこう」、「応援していこう」、「私たちも地域の担い手として頑張っていくんだ」ということで立ち上げ、活動を続けてきている組織でございます。

「山科醍醐こどものひろば」とは、地域の周りの住民の方々や大学生たちが実行委員会を作って、イベントを作ってくれたりしている組織です。多くのボランティアの方々、住民の方々が主体になって取り組んでいる組織でございます。

元々は親と子の劇場、親子劇場と言われるような組織が母体になってスタートしています。大阪にも同じような冠を持った団体さんもいくつかまだまだ存在されていますが、長く会員を募って会員の人たちを支えていく組織として活動作りをさせていただいた流れです。

私自身もこの80年代に子どもとして参加して、気が付いたら30年ぐらい経っていて、代表になっちゃいました。どうですかみなさん、皆さん方の子どもさんが地域の担い手として、30代40代の方がいてくれますかね？私たちの組織では、私はそうなりましてけども、私以外でそういう人がいるかと言われるとごくごくわずかです。みんな子育てに忙しいようです。しかし、サービス利用者としては、たくさん来てくれています。

### 《困っている子どもは何に困っているのか？》

地域の中で、私たちは体験活動とか文化を届けるとかを軸にスタートしてきたんですが、そういった中で楽しい活動として文化を届けたり、居場所を作ったり、遊んだりをする「健全育成」という言葉をここでは使わせていただいていますが一活動を行って来ています。

けれども、子どもが主体的に「何か楽しい事をやりたい」と言った時に、そういった活動は集団であったりすることが多いですが、なかなかそういう集団に馴染めなかったりする子どもがすくなくないのです。

そうした子どもは、元々成長過程においてコミュニケーションに悩みがあったり、病気

であったり、事故であったりとかで何かしら暮らしていく上で困難を抱えてしまった状態になってしまった子どもたちであったりします。また、生まれながらにしてということもありますし、家族の離婚という状況の中で少し精神的に不安定になってしまった子ども、中には虐待されている子どもも含まれています。

最近、虐待はニュースでどんどん取り上げられるようになりました。今までも少なかった訳ではないですが、凶悪な、子どもが死に至るような虐待がたくさん表に出てくるようになって、みなさん方もテレビなどで見ていただいておりますが、そういった子どもたちが地域の中に少なくない数で存在しています。

そういった子どもたちに伴走して行って、一緒に大人になっていきたいと思います。このような援護が必要な子どもたちの応援ということを、私たちは特定非営利活動法人という冠を持って組織として動いていますが、ひとつの組織としてできることは限られています。

### 《山城醍醐こどものひろばの多様な活動》

山科醍醐地域で、児童福祉法で言うと18歳未満が児童になる訳ですが、児童は3万人いるんです。3万人に向けた、しかも年齢幅が18歳ある子どもたちに一様に活動を届けていくことは現実的ではありません。このため、それぞれ子どもたちと関わるいろんな人たちの活動を一緒に応援したり、時には支えあったり、一緒に共同開催したりとかしています。地域丸ごとで子どもたちを応援していくために、地域の連携とか、「そういったことは大事だよ」ということで啓発的に取り組んでいくことをさせていただいています。

活動の雰囲気は、本当に小さい民家みたいなところの1階で子育て広場をやってみたり、地域にはあまり大きな野外活動できる場所とかありませんので、隣の津市さんとか京都市の山の中、過疎地で使っていない学校とかいっぱいあるので、そこの自治会が「休校にしている学校を使っているとなりとくみをしてください」ということで貸して下さることがあるので、そういった場所に赴いて活動をしたりしています。

また、子どもたちの体験もそうですし、表現をするという活動もとても大事だと思っているので演劇と一緒に作っていくことを小学生から60歳ぐらいまで、じいちゃんやばあちゃんにも混ぜてもらって一緒にワークショップ、一緒に稽古をして劇を作っていくことなど、それぞれの関心に合わせて取り組みをさせていただいたりしています。

この他、地域の商店街で車停めをしてイベントしたりしています。こういった地域はきっといっぱいあると思うんです。まちの中で楽しい子どもたち向けの遊びとか、そういったものを地域の人も楽しめるように、大人向けには出店をやってみたりとか、夜は居酒屋さんたちが屋台を出してお酒も飲めるバル(居酒屋)という形で野外での取り組みをセットにしておじいちゃんも子どももみんな楽しめるような状態を作りましょうということでとりくみをさせていただいたりしています。

#### 《一人一人の子どもにかかわる中から貧困問題が見えてきた》

僕たちの組織の中で、団体の中で、困っている人からもっと楽しくというような活動まで、実はひとつの組織の中で全て揃っています。ある意味一番左端が×な状態の子どもとしましょう。別に×△○◎と区切れるわけではないですけども、例え話しです。今の子どもの状態として×と言われる子どもたちを×から△に押し上げていく、○に押し上げていく活動をしています。

○が当たり前というような状態とってください。やっぱり生まれてきた環境、育った環境、もしくはそれぞれの子どもの個人の体力、そういったものもあるかもしれません。しかし、今、当たり前と日本中で言われることが叶わない子どもたちが、やはりたくさんいますので、そういった子どもたちの状態を当り前に押し上げていくっていうことはもちろんですが、当たり前と言われる子たちは○から◎に押し上げる活動をしているのです。例えばお稽古、習い事みたいなことであったりとか塾にいたりする訳ですよ。後で少し触れますが、子どもの貧困の話でいうと、家庭の所得と教育、学力とか学歴が比例すると言われていて、所得が高ければ学歴も高くなっていい仕事に就けるとい調査結果が

出ています。別にそれで人生が豊かになるかと言えばそうではないのですが、選択肢として勉強したいと思った時に勉強できる選択肢が与えられているのか与えられていないのかということに関しては平等であっていいんじゃないかなと思っています。でも、なかなかその平等が与えられてないという状態がやはりあるのです。

僕たちは個々の当たり前の人たちが○から◎になるための選択肢がたくさん与えられているのが当り前の状態だったりします。でも僕たちは結構△とか×から○まで何とか持っていきけるのですけれども、○から◎というより豊かにしていく活動ってなかなか作れなかつたりするのです。このため、ひとつの組織の中で◎まで持っていきけるような活動作りしていこう、ひと繋がりやりながら。でも頑張り続けるってしんどいんですよね。

子どもたちも、それを支える家族もなので、ちょっと休憩したいなと思ったら活動として、もっとゆっくりとした活動に戻っていったりとか、行ったり来たりしながら少しずつ少しずつ状態をよくしていくってことを目指して、そしてそれを支えられるまちにしましょうということをしていただいています。

楽しい活動とか、ちょっと困っているんだっていう子どもたちと出会って活動を支えていくといろんなことが見えてきます。皆さんのこのまちだとほとんどの人たちはそれぞれの顔と名前が分かるんじゃないですかね。どうですかね。分からない人もいるかもしれませんが。分かっていると色々な悩みがぼろぼろ出てくるかもしれません。

山科醍醐というまちはちょっとそういうことを語るにはサイズが大きいんですよね。なので、なかなか見えてこない問題、悩みっていうのもたくさんありますが、楽しい活動とかそういった人が伝える場所を作って顔が見えてくる、繋がってくるとやはり悩みがこぼれてきます。「ちょっと参加費払えへんのやけど行きたいんだ」という悩みです。安い活動の時はそんなことは言われませんが、例えば「宿泊を伴うキャンプに行こう」、「子ども連れだして行きたいんだ」、子どもが1人の時はあんまりおっしやる方は少ないんですけど、兄弟姉妹が2人3人おられるご家族だと「2人分だとちょっと厳しいんです」、

「3人も厳しいんです」、「1人行けないんだったらみんな行かせる訳にはいかないんです」と言う話から始まっていきます。

実際には、そこからぼつりぼつり「実は最近、主人の仕事が上手くいってなくて」と言うことだったらまだいいですけど、離婚をして家族関係としての「子どもともぎくしゃくしてるんです」、「ぎくしゃくしてるからこそ、そういう体験を行かせてやりたいし、楽しみにしてるんだけど子どもも。でも3人は送り出せないんです」と言うご相談は少しずつ少しずつ出てきます。出てくると、だんだん暮らしの話になっていきます。最初の入り口は自分私たちの活動に参加できる、できないというご相談だったんです。そこから少しずつ、今の暮らし、子どもに対しての悩み、そのことが少しずつ見えてきます。また活動していると、やっぱり落ち着かないことがいっぱい見えるんです。

私たちが活動を始めた80年代というのはこういう活動があまり公にはされてきませんでした。90年代に入っていくと土曜日が休みになりました。ゆとり教育という言葉の中には、「土曜日を使って楽しい文化体験や野外活動体験をなささいね」ということが含まれている訳です。だから教育委員会や公共施設が民間の私たちよりとっても安い物作り活動体験とかキャンプとかをする訳です。そうすると、みんなそっちに行くんです。だって学校の友だちが行くんです。みんなそこに。安いし。多くの人たちはそこに行きます。私たちの所に来る子たちは、そういった活動では満足できない子か、いつもいる友だちが来ない場所に行きたい子たちが来るんですよね。学校でいじめられたり不登校になってる、そういう状態になっていくと年々そういう物足りないと思ってチャレンジに来てる子たちと、学校が嫌だと思って来てる子たちとの凄いコントラスト、続に言うことができる子とできない子が極端に集まってくる訳ですよ。そんな活動していて、その子たちそれぞれの集団で楽しんでくれてる訳です。学校などの既存の場だけでは楽しみきれない子どもたちが私たちの場で楽しんでくれているのです。

でも私たちは、本当は「この子たち、もうちょっと違う関わり方したほうが楽しんでしてくれるんじゃないかな」、「一人一人の困

りごとは違うんで、もっとその子がひとりで楽しんでくれるプログラムがどうやって作れるかな」と考えたのです。

行政だったらひとりひとり個別化してくと、コストが掛かって仕方がないです。支援しようがないですが、地域の私たちが「この子のためになんかおもしろいことできひんかな」とか「この子どうやったら楽しんでくれるかな」なんてことを考えながら今度は個別の支援をしていくのです。個別で子どもたちと関わって「もっと楽しんでくれるにはどうしたらいいかな」と考えてやっていく中で経済的な悩みが見えてきて、今、貧困対策をさせていただいています。

### 《子どもの貧困の「貧」ではなく「困」に焦点を》

今日の本題としては「貧困」と「ひとりぼっちのない話」ですが、「貧困」の話は実はお金の話というよりは、そもそも集団に馴染めない子どもたち、困り事を持っている子どもたちがどうやったら笑顔になってくれるかなってことから始まった取り組みでした。その背景に「お金の話があったね」と言うだけの話ですが、僕たちが子どもの貧困対策という言葉を使わしていただけてますが、もう少し考えていくと、「貧困」とは貧しくて困るって書くんです。貧しさはなかなか解消しませんが、貧しい結果、困りました、その困り事の方をどうやって解決できるかなということ意識しました。

「困っている子どもって何に困っているのかな」、そういうことを考えられる活動作りをしていこうと考えました。少なくとも子どもの貧困って、子どもが貧困だと言ってる訳じゃないですよ。だって子どもがお金を稼いでくるわけじゃないのですから。子どもがいきなり1億円持っていたらびっくりしますよね。子どもが貧困な訳じゃなくて、子ども自身が暮らしている環境自体が低所得とか、貧乏という言葉を使いますが、そういう家庭環境にある中で実際にお金がないということなのです。

次にお金を生活として使うという行為に至った時に、やりたいことができなかつたり、お金がないことが障害になって様々な支援が受けられなかつたり、チャンスを失っていきつつという生活をする上で困った状態になり

やすくなる。子どもの貧困とは、以上に述べたような社会問題です。

実際に貧しいから不幸になる訳じゃないのです。それは戦前戦後の本当に苦しかった時代を生き抜いた人たちも「私たちががんばれたよ」と言っていますが、多分がんばれた理由があるんです。その人たちは、貧しさそのものは状態なので、社会の環境だったり所得が少ないというだけのことで、貧しさだけが不幸を生み出す訳ではありません。実際に

「貧しいけども支えられてきたよ」と言う人たちはたくさんおられます。

今、子どもの貧困をテーマにした時にいろんな人たちが活動されています。「元々私が貧困だったんです」と言う人たちもいっぱいいます。そういう人たちは運命的な出会いや、支えに助けられて大人になっています。お金がない中でいろんな悩みが出てくる。その悩みを解決する方法をお金以外で届けてくれた人たちがたくさんいるから実は困らなかったのです。だから、「贅沢はできなかったけど、ちゃんと幸せになりましたよ」と言う人たちがたくさん実際にはいる訳ですね。

でもその一方で幸せになれない、困った状態になって自殺を選ぶ、そういう子どもたちがいる。家族がいる。そういった状況も一方ではある。

貧しさから派生してくる困り事を解決していくことが重要なのです。実際、経済的困難が起こった時に、不十分な衣食住とかそのイメージがわきますよね。実際にいるんですよ。皆さん方、もしかしたら目にするかも知れない、町の中にホームレスの方がいますよね。最近はずいぶん少なくなってきました。その中に中学生がいたらどう思います。福祉事務所経由で私たちに繋がってきた子どもが、中学生時代からホームレスやってきた子なんです。学力もコミュニケーション能力もすごく低いんですね。ある意味、心は子ども、体は大人みたいな状態です。福祉事務所から「ちょっと受け入れお願いできひんかな」と相談を持ってこられたりしたこともあります。

### 《貧しさから派生しやすい「困った」を解決する》

実際にこの日本でもそういうことがあります。大体は、虐待やネグレクトみたいな育児放棄と言われるような親の課題がセットに

なっていることが多いです。暮らしが安定していない中で勉強ができる状態がある訳ではないので勉強する機会が減っていく、ひとり親家庭の子どもたちがそんな状態に陥りやすいということはデータ上言われているんですが、実際には兄弟姉妹も多いことが多いです。

長女は中学校3年生、弟は保育所年中さんみたいに、年齢差がすごくあったりすることが多いです。中3生は本当は受験勉強したいんだけど、お母さんが夜遅くまで働いているから、毎日毎日保育所に送り迎えをする訳です。

助けを求めていくかと言うと、そうではなくて孤立していつたり、物理的に生きていくことに時間をとっていくことで学ぶ時間が減っていく。そういった中で、学校になかなか行けなくなって、そういう子どもたちが夜の町に出て行くようになったり、同じような仲間に出会っていく。そういう人たちを世の中は「非行」と呼びます。非行少年・少女たちはさらに見えないところに入り込んで、そこで出会った若者同士で結婚していく、子どもができるということが起こったりします。貧困、虐待は連鎖するって言われています。次の世代がさらに貧しくなっていく現状が生まれています。現在、6人に1人が日本で暮らしていく上でお金的に困っていると言われてます。統計上ですので、例えば、農村地域に暮らしていたら同じ所得でも食べるのには困らないかもしれません。でも進学するにはその地域に大学はないかもしれません。単純に進学しないとすれば生きていけるかもしれません。子ども自身が将来、本人が本当に希望して望んだ状況かと言えばそうではないかもしれません。状態によって生きていく、単純に生き延びていくことにおいては十分かもしれませんが、今の時代、未来を生きるために必要なお金が足りていない子どもたちがこれくらいの数いるんですよと言われてます。

虐待は、年間7万件と言われてますが、虐待そのものが実際に起こっている件数が7万件ある訳じゃないです。相談件数が7万件以上あるってことです。これも、年々増えています。後でもデータをお見せしますが、データが公開されたのは1989（平成元）年

だと3桁位ですから。その当時は、そもそも虐待をみんなが、ただのしつけだと思っていたのです。これは家庭内暴力、ドメスティックヴァイオレンスという言葉を使ったりしますが、家庭内暴力は夫婦喧嘩っていうことだったりします。認識が変わっていくことで少しずつ社会問題としてだんだん位置づけ、意識され、それがちゃんと支援につながっていく、あらわになっていくと数はどんどん虐待では増えてきています。

虐待の背景としては経済的困難、ひとり親家庭で育った、夫婦の仲が悪かったことなどが、数字上の要因と言われています。こういった問題は子どもの貧困に類似している話ですので、虐待を解消していくために、貧困を解決していくことはとても大きいことだと思っています。そんな虐待も年間1.6兆円にも及ぶ社会的損失があります。税金を上げるより、虐待をなくした方が効果的かもしれませんね。

さっき「子どもの貧困は連鎖する」と言いました。生活保護受給の2世代目、3世代目の方がいたりする訳です。3世代目の子どもたちは、小学生ながらに「将来は生活保護で生きていくねん」と言っています。いい仕事に就く気がない。だから大学に行く気もない。勉強する気もない。楽しくワイワイできたらそれでいい。そういう子がクラスに1人いたら授業が成り立つかなと言うと、他の子どもたちも同じ状態に引き込まれるという状態もあるかもしれません。そんな子どもたちが大人になって生活保護を受給していく、一人当たり生涯で5千万円ですよ。

でも実際に困っている人たち、生活保護を受けてもいい状態になっている人たちはたくさんいて、実際に生活保護を受給している人たちの数は1/5と言われています。残り4/5の人たちは、生活保護制度を知らない人たち、もしくは「あなたもうちょっと頑張ればいいでしょ」と言われてせめぎ合いをしている人たち、さらには、「絶対にそういう制度にお世話にならないでいこう」と頑張っただけの人たちです。

その4/5の中の人にひとり親家庭の中に、子どもを食べさせるために仕事を3つ4つと掛け持った母親がいます。その母親が、数年たったら自分がうつになり、腰痛になり、仕

事ができなくなって家にいるようになった時に、初めて子どもに障害があることに気付いたという事例があるのです。自分では子どもに関わっているつもりではいたけども、たくさんの仕事の合間でしか出会わなかった子ども、限りある時間だからこそ、子どももめいっぱい、いい姿を親に見せようとしていたんでしょね。だからこそ、気付けなかった。頑張ってきたのに、自分は病気になり、結果、生活保護の世話になり、なおかつ自分の守りたかった子どもの状態にも気付けなかった。そして思春期を迎えた子どもと喧嘩が増えた。この事例のように頑張ったけども上手いかない御家族とも私たちは出会ってきています。そうやってあがいている人たちが、実は1/5もそうですし4/5の中にもそれなりの数があることを知っていただけたらと思います。

#### 《年収200万、月収17万での母子家庭の現実》

日本では年収400万円位が平均所得としてありますが、こういうことを考えてみてください。年収400万円です。住宅費、食費を支払わねばなりません。月収にすると33万円です。こうやって割り振っていくと貯金もできると思います。

これが、かたや年収200万円、月収17万円の場合、割り振ってみてください。1ヶ月、2ヶ月、1年、生き延びていくことには別に事欠きません。でも母子家庭で、子ども2人としみます。そして、その子どもが進学すると想定してください。大学へ1人行かしたら4年間で500万円かかりますね。120万円×4位です。500万円を積み立てていこうと思ったら、子どもが生まれた0歳から18歳になるまでの18年間、月2万円位積み立てないといけません。月収の17万円から2万円とつたら15万円です。そんなことをやっていくと結構ギリギリなんですよ。

住宅費として、子どもが2人いるからせめて5万円位の所に住みたいということにあるでしょう。食費も年々上がって行くかもしれません。これで子どもがアレルギーとか持ったら大変ですね。アレルギーを持っている子どもは普通の子どもより食費が1.5倍から2倍かかると言われています。自分たちが節約したくても節約することが命に関わったらできないですよ。そんなこととか、病気

になったらって思うとお金がかかる。一生懸命に病気になるようにしていこう、病院にかからないようにしていこうということで、結果悪化していくこともあります。

この他、通信費が必要です。みなさんも携帯をお持ちだと思います。携帯電話を当たり前のように持っていますね。中学生は90%以上持っていますから、お金があろうがなかろうが、だってもってないと仲間に入れられないんですもん。昔は「手作りのおもちゃで仲良く遊びましょう」、もしくは「物を使わず走り回る鬼ごっこやかくれんぼをしましょう」という遊びが主でしたが、今では携帯電話を使ってそれぞれで繋がり合って通信で、ネットワークで、機械がないと遊べない遊びでみんな遊ぶ、そんなことを今の子たちはします。携帯電話を持ってないと仲間に入りようがないんですよ。そんなことから仲間はずれが生まれてきます。仲間はずれというか、お互い気まずいですよね。お互いが気を使って呼ばなくなっていく。だから、親はそんな姿を見て食費を削ってでも携帯電話を持たせようとするわけです。実際便利だっていうこともあります。

あと地域によっては車がなかったらお母さんたちとかでも仕事に付けなかつたりするんです。仕事はあるけど車で20分と書かれていることが当たり前なんです。歩いて20分でいけないですよ。

そういう中ではお金の使い方は少しずつ違ってはきますが、必ず固定費として出ていくものが存在しています。その中で未来のために貯蓄しチャレンジを応援するお金の使い方ができるかって言ったらそうではないし、子どもも大人に近づけば近づくほどそれに気づいていきます。「あ、うちは違う」とか「あ、私は大学行ったらあかんねんや」「お母さんなんにも言えへんけどあかんわ。諦めよ」って思ってしまう子どもたちがいてるんです。

また、いじめられたら、その学校行きたくなくなりますよね。例えば不登校になります。そこで転校したいとなった場合、選択肢のひとつは私立です。あるいは通信制高校とか定時制があります。この中で、私立の方が入りやすいです。でも学費は高いです。転校するだけで解決するかもしれないけども、その

チャレンジにお金がかかります。でも明らかにそういうイレギュラーな対応をするためのお金はないのが月収17万という金額です。

2010年の調査では相対性貧困率は16.0%、6人に1人となっていますが、年収は150万円とかの数字です。都市部で暮らしていくのは相当厳しいですよ。データが古いですけども2009年では母子世帯の貧困率は50.6%と高いです。

今、女性の4人に1人が結婚しないんです。結婚した3人に1人は離婚します。残った2人のうちの半分は数十年後に夫や嫁に不満を抱えています。本当にハッピーなのは残りの1/4だけです。

先ほど紹介しましたように、結婚した人の1/3は離婚します。その1/3の母子世帯になった人たちの半分は貧困世帯になります。結構な確率ですよ。これは働き方の問題にもあると思います。結婚して子どもが出来た時に女性は仕事を辞めることが多いのです。今の世の中、男性は働き続けています。結果として男性がもし子どもを引き取って父子家庭になったとしても雇用契約はずっと正規雇用のまま続いている訳です。そこから状態をどう変化させるかという話なので、所得には響きますが大きな減額にはならないんです。

でも女性は再雇用されないといけない訳です。再就職しないといけない訳です。すでに雇用されている状態から契約を交渉で変えていくという男性と、新たに仕事を見つけないといけない状態にある女性とでは条件が大きく異なります。だから女性の方が状態が厳しくなっていくのが今の日本でございます。

### 《子どもの虐待と背景にある貧困》

実際、虐待の相談件数はどんどんうなぎのぼりですよ。1997(平成9)年、今から17年前は年間5千件位です。その後どんどん件数は増加してきています。皆さんの意識がどんどん上がっていったからこそ虐待の連絡が入るようになってきていますが、その中で毎年100人位子どもが死んでます。皆さんが毎朝見るニュースで子どもが虐待されて亡くなりましたというニュースを追っかけるだけでも相当な件数が出てくると思います。

虐待が行われた背景としては、ひとり親家庭、経済的困難、近所からの孤立、夫婦不和などがあります。先ほど紹介しました結婚の

形態で言いますと、1/3が離婚するのと、1/3が家庭不和になります。リスクとしては相当高いですよ。そういう家庭で過ごす子どもたち。

ひとり親家庭になることによって女性の所得が減っている状態と両親が揃っていても経済的困難という中で虐待が行われているのが上位2つです。いかにお金、働き方、働くことによるストレス、そういったものが子育てに影響しているかということのあらわれだと言えると思います。生活保護を受けている人たちに「子どもの時どうでしたか？」と尋ねると「子どもの時もしんどかったんだ」という人たちとか「親が不仲だったんだ」と言う方はたくさんおられます。ここをなんとか解消していくことが重要なんだと思います。先ほども少し触れましたが、子どもの貧困と相対的貧困率のグラフですが、日本の相対的貧困率は現在16.1%、子どもの貧困率は16.3%です。子どもにもしわ寄せがいつているという現状があります。

これは京都の数字ですが、生活保護受給世帯に限らず、かなり小中学校では就学援助の制度を取り入れて少しでも学校に通える子どもたちの学びを応援していくとくみをされています。全国で就学援助の受給をいっている子どもたちが155万人もいるんです。それでも、比率としては15%位です。私が活動している京都で20%位です。でも平均して高い、低いっていう話よりは、結構しんどい学校とそうじゃない学校とがあってまばらなんですよ。

私たちは山科醍醐の地域で活動していますが、ある小学校では就学援助率が7割を超えています。その小学校はひとり親家庭率が50%位です。虐待認知件数も非常に高いです。外国にルーツのある子どもも多いのです。しんどい場所に、土地が安い、家賃が安いからしんどい人が救いを求めて集まってくる。そういうコミュニティが出来上がっていく。

だから数字的には悪いです。でも、みんな頑張っておられるんで成績は良かったりします。京都市の成績の平均で言ったら平均より上にいくんですね。頑張れる環境があるかないかということとはとても大きなことかなと思っています。

大阪はどうですかね。この住之江、住吉区、両方の人権の集いとしてやっていますが両方の区の数字とかを基に分析してみて、是非皆さんに関心を持っていただければと思います。

### 《制度はあるが当事者が使えないという問題》

そういった中で子どもの貧困には「親向けの支援と子ども向けの支援が必要だよ」と言われています。国の会議でも「こんなことしたらいいんじゃないか」ということで幾つかの提案が出されていたりしています。見ておいていただければと思います。(9ページの制度の一覧を入れる)

少し具体的な事例をあげますと、出産前からの話です。若くして子どもを産む子たちも多いですから、出産前からどういうプログラムがあるのか、どこに相談に行ったらいいのかということはちゃんと伝えておかないといけません。また、お金の支援、サービス、物の支援を使い分けて届けていかなければいけません。

あと低学力の結果、高度な仕事につけない方々もおられますし、そもそも、こういう制度があっても書類を書けない人も多いので、「ちゃんとそういったトレーニングをしましょう」、「就労支援をしましょう」ということも重要です。

子どもだったら安心できる場所とか、健康の維持、家庭環境が悪いかどうかで歯医者さんが見抜いたりします。小さくして虫歯が多い、歯科検診で引かかるんですよ。虫歯だけではなく汚れがちゃんと取れていない。磨き残しがたくさんある。歯磨きを子どもに教えたとき、初めは磨き残しがなくなかチェックしてみたり、ちょっと磨き残しがあったら、こすってあげることを経験したことがある人たちがおられるかもしれません。そういうことをしていると歯の健康状態は保てていく訳ですよ。もちろんそうしてても、虫歯になることがあります。その進行具合であったりとか、その量ですよ。全体の状態が全部が悪いっていうことにはならないので、そういったことが起こっている子どもたちをいち早く見抜くのが歯医者さんだったりします。いろんな医療機関と繋がっていきつついうことで早く子どもたちの状態を見抜くということもそうです。そうすると、お金をかけずして

検診を受けられる状態があることが大事です。子どもたちの食べ物が偏るんです。あと子どもの中には手料理を食べたことがないという子どもがいるんですよ。食事はコンビニで買うか、外食することしか知らない子どもがいます。結果、高カロリーなものを摂取しているんで、お金がない、貧困だと言われても太っている子ども、肥満体質の子どもがいたりします。だから食べるってどういうことかを伝えていくプログラムも必要だったりします。

海外では薬物の話がありますが、今は危険ドラッグがかなり問題になっています。そういう薬物、妊娠の防止、実際中学生で妊娠してしまう子もいるんですね。そういう子たちに既存の子育て支援の窓口について他の20代、30代の新米ママに混ざれと言っても無理がある訳ですよ。そういう子たちを応援する窓口とか、学びの機会をどう作っていくのが大切です。

義務教育の間は頑張れるんですけど高校へ行くと追跡ができなくなります。中退も多いんですね。高校も大学も専門学校も、企業さんも3年で辞めさせないということを含めて、みんながどうやってドロップアウト、中退させないかっていうことを考えて取り組みをされているところが多いと思います。

家でも学校でも安心できないのだったらどこで安心を求めるのかという問題があります。今はそれが夜の町だったりするわけです。だから悪い大人に引っかかることもよくあります。でも、悪い大人は話を聞くのがとっても上手で、その困っている子どものことを親身に話を聞いてくれて夜の産業に連れ込んでいくのです。子どもからすると「こんなにも私のお話を親身に聞いてくれる大人はあなたが初めてだ」となる訳です。

そういう中で自分の暮らす町に当たり前に家や学校に居場所がなくなった時、安心できなくなった時に「安心出来る場所があったらいいよね」と言われています。たくさん制度はあるんです。奨学金とかもそうです。国としてやってるものと各自自治体でやってるものがあります。京都府でも奨学金の制度があるんです。京都は大学の町なので大学進学したい人たちも多いから、「奨学金出しましょう」と京都府が応援する訳です。

制度はあるんですけど、当の困ってる子どものお母さんがそれを知らないんですよ。もしくはその制度を使ったら進学させられるのに進路指導の先生が知らないんです。学校の先生は生徒がたくさんいすぎて把握がしきれていないのです。役所の窓口も管轄がどんどん変わったり、制度が変わっていくのでわからなくなっているのです。そして申請主義なので書類を渡しても、書くかどうか、持ってくるかどうかはそのご家庭次第です。結構役所の書類って簡単なことを難しく書いてありますよね。低学力の中卒のお母ちゃんとかが書けますかね。書類がひらがなだと自分の名前ぐらいは書けるのです。そういうご家庭が自分たちの暮らしが楽になるかどうかということを中心に考えて書類まで書けるかと言ったらそうじゃないってこともたくさんあります。

当事者の人は使えないし、また「そういう支援をやってくださいね」、「居場所作りやってくださいね」、「食事支援やってください」と言ったところでやる人がいないとなるんです。お金を付けてもやる人がいない、やったらやったで利用者があまりいない、じゃあお金を付ける意味がないと悪循環に陥って、結果、その地域で活動がなくなっていく、行政の支援がなくなっていくということがよく起こります。

### 《誰が制度を届けるのか?》

そういう意味では、誰が制度を必要としている人に届けるのが大事だと思っています。子どもの貧困対策と社会的には言っていますが、山科醍醐子どものひろばでは子どもたちには貧困とは言いません。お母さんにも言いません。でも子どもたちは最近インターネットで調べるんですよ。引きこもりの子とかは時間がいっぱいありますから。人の個人情報とか調べますから。私も子どもに会うと「この間バスに乗ってたやろ」と言われますね。

こうやって外向けに言ってることも本人たちは気付いていたりしますが、子どもの貧困対策の中で考えなければならないことは、まず安心、安全、食事とか、居場所とか、褒められた経験がないという子どもたちがたくさんいるということです。

また、昔は褒められたけど、やはりつまずきからついていけなくなった、不登校になっ

た子どもたちが学校に戻れない理由は、勉強がついていけないのでそこをついていける状態だと戻れるかも知れないけどついていけない自分を見せたくないのではなかなか踏ん切りがつかないという子どもたちもたくさんいます。なので、成功体験を積み上げていく場合は、まわりの当たり前前の状態に追いつく経験、学びを積み上げていくことが大切です。

僕たちはあくまでも子ども側の支援をベースにしています。だから親とか保護者の支援をダイレクトにたくさんやっている訳ではないですが、子どもを引き受けることによって安心やゆとりができるのは子どもだけじゃなくてお母さん、お父さんもなんです。お母さんの電話を聞くっていうだけでもお母さんはスッキリします。僕たちに1時間愚痴を言った結果、「今日はうちの子の顔を見ても怒らんで済みそうやわ」と言って電話を切る人がいるんですね。電話1本で済むんだったらいいと思いますけどね。

逆に子どもも、中学校3年男子、身長175cm、キレたらお母さんひとたまりもないですね。でもブレーキがきかないから、そういう中学生が親に暴力を振るう、という逆転現象が起きていたりします。そういう子たちだからカッと手が出てそれで発散をする、表現をするんだけど、さすがに地域の中でいきなりそういうステップにはならないので、まずは口で暴言を吐いてみることからが始まります。でも、その暴言をひたすら聞いてあげるので。最初の活動日は2時間ひたすらその子が喋るだけだった。そんなことを続けていく中で少しずつ言葉が、彼の演説からディスカッションに変わっていくとか、議論に変わっていく、会話に変わっていくのです。そんなことで少しずつ少しずつ子どもは変化していきます。結果、家に帰ってもその子は家で荒れる必要はなくなるので、お母さんの安全が保たれる。というようなことがあったりもします。

### 《小・中学校との連携したとりくみ》

あと、僕たち最近は小学校や中学校にスタッフを派遣して、一緒に活動を作ったりしています。今年は、戸籍があっても、所在不明になっている児童の問題がニュースでよく出ていました。所在不明児童です。「小学校の入学式に来るはずの子が来てないんですけ

ど」と言う話になる訳ですよ。実際に高校を卒業した後の子どもたちの追跡って結構難しいんです。両方、結局入口も出口もそうなんです。小学校から中学校は義務教育っていう仕組みがあることによって学校に来ていないっていう状態もちゃんと分かるんです。来てたら来たで、「この子、何か困ってそうやな」というサインはキャッチできるんです。だから、僕たちは学校と関わることによって学校の中で、教育を通じて応援できることは一緒に教育を支えましょうということでもとりにくんでいます。でも、教育で応援できないことも、今、先生方には背負わされている部分も沢山ありますので、それは地域で担い直しましょうということと一緒に考えながら、今、放課後に地域のPTAとか民生児童委員の方で、補習の勉強会しながら一緒にお菓子を食することをしています。そういうことをしながら小中学校を、実は先生を元気にしていくっていうのはあるんですね。

その学区の小中学校の先生だけで100人位で研修をしたんです。困り事はですね、子どもに関わることで以外ばかりでした。子どもにかかる時間はいくら残業しても惜しまない人種なんです。先生って。大好きだから。でも、そこに時間をかけないことにすごくストレスを抱えておられる。子どもたちひとりひとりに向き合う時間を取られないことにストレスを抱えておられる。ちゃんと伝えなければいけない教育を届けられないっていうことに悩みを抱えておられる先生方多いので、そういった余計なものをどうやって解消できるかということと一緒に考えたりしています。校長先生もそういった中で悩みを沢山お持ちなので、最近は校長先生とだけで月2回位飲みに行くっていう発散方法をとったりしています。そうやって、学校を応援していくということと、そこに关わる人を学生も地域の人も増やしていこうということもさせていただいています。

実際に私たちの中では例えばさっきの貧困の図、イメージ図の中にあつた不十分な衣食住の話だと、一緒にご飯食べましょう、お風呂入りましょう、宿泊しましょう、ということをしします。**(6頁の貧困関係イメージ図を入れる)** 親にご飯を作ってもらったことの無い子どもからすると、一緒に作るっていう経

駿とかもない子が普通にいますからね。「久しぶりやわ。複数の人間と一緒に食卓囲んでご飯食べるの」、「皆で食べると美味しいなあ」って言うんですよ。学生が作ったご飯を。そういった当たり前をひとつずつ回復していくことをしています。お風呂もやっぱり1週間入ってない子もいます。私たちの活動はそれぞれの子どもに週1回ずつ位プログラムの提供の仕方をしているので、活動がお風呂の子もいます。歯磨きができない。トイレが上手くできない。宿泊すると、昼間頑張ってるんでしょうね、寝言で「ぶっ殺す。」って言いますからね。ガクガク震えてますよ、寝ながら。昼間の姿と夜の姿、両方見て、やっぱりその子どもはひとりになっていくと思いますので、そういった子どもの様子を捉えながら、できることは何なのかっていうことを皆で考えながら活動をさせていただいてます。私たち元々演劇とか野外活動キャンプのプログラム沢山あるので、文化みたいなものを届けていくこともやっています。

普通の人たちの当たり前のこと、さらにはより良くなっていうことを自分たちの活動の中で届け直すことをしています。むしろ、プログラムの内容によっては普通の人よりもよっぽど贅沢なプログラムを受けたりすることも多々あります。学力は私たちの所に来てもらっての塾的な勉強もそうだし、学校の放課後で補習をサポートしたりっていうこともそうですし、不登校の子どもの家を訪問することも場合によってはやったりして、学習の支援をさせていただいています。

あと、そういった活動の場面で会うことをまず作れば関係作りとか、その子ども自身が自分に対する評価を高めていくための成功体験はひとつずつ積み上げることが可能なんですね。出会わなければ子どもの内面を変えていく、繋がりを作っていくっていうことはなかなかできませんので、まず会うということ。そして出会った場面場面で子どもにつきスタッフを1人毎回配置して関わりを持ってもらう。私だけのお兄ちゃん、お姉ちゃんみたいな味方を毎回少しずつ届けていきながら子どもたちに「あんな人になりたいな」という気持ちを持ってもらう、感じてもらうということをしています。

少し活動をイメージとして学習支援をやっている流れを感じてもらうために映像を見てもらおうと思っています。映像は「貧困を背負って生きる子どもたち」というタイトルでインターネット上でもいくつかのパターンで流させてもいただけてますが、今日はそのうちの一番最初に作ったものを見ていただこうと思います。映像をよろしくお願いします。5分位ですのでセリフが出てくる訳じゃないです。音楽にのせてテキストで出てきます。だから読んでください。

(映像) 「貧困を背負って生きる子どもたち」の上映

【注】動画は、山科醍醐こどものひろばのホームページ内「情報発信の動画のいろいろ」から、見ることができます。

はい、ありがとうございます。今まで私たちの活動の中で出会った子ども、活動に繋がった子どものお話を少しストーリー仕立てでご紹介させていただいている動画になります。後編は高校に受験をしてハッピーエンドを迎えるという話と、インターネット上にはこの弟くんの話で学校の中でどうなっているのか、学校の中で関わる支援者の人たちがどう関わっていくのかという話が、ある意味別ストーリーとして教材として提供させてもらってますが、ひとつ事例として紹介させていただきました。

《当たり前がないんだから当たり前をまず補う》

活動としては至って普通です。ご飯を食べる。遊ぶ。学校で勉強をする。ただそれだけです。ひとつひとつの場面はありふれています。だから支援をされている感じでみると、どこに支援の要素があるのかなと感じる人もいるかもしれません。単純にいうと、当たり前がないんだから当たり前をまず補うというところに尽きるんですけど。当たり前を作っていく。大阪だったら、たこ焼きが当たり前かもしれませんね。でも、作ってもらったことがなければ、作れないかもしれません。様々な体験、そういったものを少しずつ届けていく。そしてそれを作る人たちと一緒に学び研修し、アイデアを出して取り組んでい

くことをしています。今のことを多くの普通の大学生たちや地域のおばちゃんたちが頑張ってくれています。僕たちプロじゃない人がたくさん集まって作っています。当たり前の世界にプロはいないですよ。皆さん方が友だちと関わる時、子どもと関わる時、家族と関わる時、プロではないですよ。一個人、人として関わっている。僕たちも当たり前前にそこに暮らす人として子どもたちと関わっていく。そんな大人が親とは違う、先生とも違う関わり方をしてくれた時に、子どもは一言、「怒らない大人がいるんや」って言うんです。ずっと怒られてきた。指導されてきた。しつけをされてきた。そんな大人たちに囲まれた中で違う関わり方、声の掛け方をしてくれた大人と出会っていく。少し縦の関係や横の関係とは違う斜めの関係と呼ばれます。

そういう関係を作り、「あんな人になってみたい」、「あんなお兄ちゃんになってみたい」、「お姉ちゃんになってみたい」、「仕事とか遠い将来のことはようわからんけど」、そういうモデルを少しずつ届けていくのです。特に学生は就職活動で悩むんですよ。子どもたちとご飯食べながら、就職活動中にスーツを着て手伝いに来るんですよ。「就活やってん」と言って、ご飯食べながら子どもに愚痴ってるんですよ。「聞いて。今日面接でこんな言われてん。どう思う?」、「お兄ちゃんでも悩むねんやん」、「大変なんや」、でも「あがいてるな」、「何か未来に向かってチャレンジしてるな」っていう姿は届くんです。そういう出会いを少しずつ作っていくことをしています。

### 《山科醍醐で現在とりくんでいること》

でも、実際に山科醍醐の地域は広いので、そういった中で子どもたちが通える距離がありますから、子どもたちが暮らすまちまちに作っていかないといけないと思うんですが、なかなかそれをやるには人が足りなかったり、場所がなかったり、資源が足りなかったり、まちの理解がなかったりしないとできないことが多いです。

山科の北側、醍醐の真ん中位、北と南でやっています。間にないんです。私たちの活動拠点。行政区の端境地域である山科醍醐の地域は実際にはしんどい地域だったりしてい

ます。みんな気になってるけど行政区のはずれにあるってことは、行政の機関もなかったりするのでサービスが届ききれなかったりする。そういう地域でやりたいな。でも私たち人も資源もないな。どうしよう。と言ってその中学校の校長とか社会福祉協議会の局長を集めて公開型で「どないしまっか。ここの地域。中学生困ってるねんけど」と言って議論をしました。

校長先生が「こんなことで困ってます」、「それしましょか」、「それいいですね」、「なんでそんなんはよ言ってくれへんかったん」、「こんななんでも解決できるやん」、「わしら行くで」と言う話もあれば、「いやー、それはちょっとね、地域的にもしんどいですわ」、「子どものことも大事ですけど、高齢者のことがね、孤独死も増えてきて見回りだけでも大変ですもん」という話もあります。

学生ボランティアをたくさん抱えて、子どもの活動の場に「おっちゃんら来てください。おじいちゃん達来てください」、「若者が昼間相手します。おじいちゃん、おばあちゃんと学生でお茶でも飲んでください」、もしくは「学生たちが呼びに回りましょうか」ということも繋がり出したらできるかもしれない。「顔を突き合わすところから始めましょう」と議論を始めました。

今、ひとつの中学校のために全ての資源を投入しています。大学を丸々突っ込んだりしています。支援のために。大学は地域に入る場所を探していたりします。国の施策でもありますので、そういう意味でも、いろんな人たちの力を借りる場を作ろうっていうことで取り組みをして、ネットワークを作っています。

行政の施策はたくさんあります。生活保護世帯の学習支援とか、京都府だったらひとり親家庭の子どもの居場所づくりの補助金出しますとか、いろいろやっています。でも、「生活保護世帯で両親がいる小学生はどこに行ったらいいのですか?」ってなる訳ですね。補助事業、委託事業になるとどうしてもその対象にならないとサービスを受けられないことはよくあります。僕たちは子どもの貧困対策を広く描いた時に、この対象の子はこのサービスを使って応援しましょう、別の対象の子

たちは別のサービスで応援しましょうとやってきていますが、サービスの対象にならない子どもについては、ボランティアの力とのみんなで寄付でも集めてやるしかないんじゃないかとってとりくんでいます。

お米をいろんな農家さんが最近送ってくれます。ありがたいですね。「古米やけどまだ玄米のままやから精米できんのっやったら食べるか」と連絡がきます。この間きたのが300kgでした。300kgっていったら消費するのが大変なのと保管する場所がないなと思って「他にこういう支援をしてるご近所、地域の団体さんに声をかけてみんなで食べて多くの子どもたちを応援することに使っていますか」と言ったら「それでも大丈夫ですよ」と言ってくださる農家の人たちがいたりします。

お寺さんからはおやつが届きます。お供物が残るんですって。「もったいなあ」とずっと思ってこられたんですよ。住職たちも無理やり食べると太ってしまうので「使って下さい」と回してくださいます。お寺に届くお供物です。ええおやつですね。大人の方が食べたくくなります。そんな上等なもの、お素麺もくるんですけどね。「1束400円のお素麺なんか食べたことないわ。」というものを送ってくれたりします。そういうことで支え合いながら活動を作らせていただいています。

### 《地域ぐるみで貧困とひとりぼっちのないまちをつくる》

僕たちが子どもの貧困が流行りだから、6人に1人だからやっている話ではなくて、僕たちのスタートラインは自分たちのまちで出会った子が「困ってるねん」というところから始まっています。そのまちにそういう困ってる子が多いからやっている訳じゃなくて、出会った子どもが困ってたから応援出来る方法なんかないかって始めました。地域で取り組むってそれができるんですね。数が多いか少ないか、制度があるかないかよりはそのまちで暮らしている「〇〇くんがこういう事で困ってるねん」、それがたまたま貧困の話だったというだけです。実際にそういう困りごとに気づいてしまった私たち。だからこそ、それを地域の中で支えていこうと押し上げていく。事業化してご飯を食べていこう、勉強をしよう、そういう事業を作っていく。

だんだんある地域から「他の地域にもあるんじゃない?」、「数えてみたらこの地域にも結構いるよね」、「じゃあ制度化してもらおうよ。支えてもらおうよ」と、社会の認知を高めていく。社会的認知を押し上げていこう。啓発していこう。そして、制度化する。今、子どもの貧困対策法が出来ました。実際に法律ができるまで、支援の内容が具体的に決まってる訳ではありませんので、制度ができてからお金がおおりて支援が始まるまでほっとくのかと言ったらほっとけないですよ。だから「できるまで押し上げているけど、今支えるのん誰やねん」と言うことで僕たちは自分たちでやっていこうとしています。それができるのも地域であったり、市民が中心となってやってる活動です。そういう意味でも私たちは、仲間を増やしていくことで啓発の取り組みもさせていただいたりしています。具体的には、かもがわ出版から『子どもたちとつくる 貧困とひとりぼっちのないまち』を出版しています。

### 《今の子どもを支えることは地域の未来を支えること》

本当に制度ができるまで、大人の責任とか親の責任とよく言います。でも、親が自立するまでほっとくのかという話ですよ。子どもを。例えば子どもが虐待で100人死んでるんですよ。ほっといて死んだ時、地域として責任が取れるのか。社会として責任が取れるのか。命は責任をいくらとっても帰ってきません。人生の時間は巻戻せません。そういう意味では悠長なことを言ってもらえないのです。今の子どもを支えることって地域の未来、日本の社会の未来を、実は支えることになりました。日本は今、少子化です。貧困率は年々上がっています。高齢者が増えてます。さて10年後、20年後、その高齢者を支える社会保障費を支えるのは誰ですか、貧困世帯がもし税金で暮らしていくならば。今貧困でない人たちが税金を上げられて支えていかないとけない社会になっていきます。そうするとまた苦しむ人たちが出てくるかもしれない。明日は我が身です。今の子どもが貧困っていうことは、将来の日本も貧困だということです。だからこそ、今応援しないといけない、でもお金としての応援は大変ですので、そのお金から派生した様々な困ったこと、「孤立して

るんやったら会えばいいやないか」、「ご飯がないなら一緒に食べたらいいやん」といったことを一個一個、小さな市町単位でやっていくことが大事かなと思っています。

実際に私たちが学校でやってることが、NHKのハートネットTVとかホームページで紹介されたりもしています。寄付を集めたりも、私たちは組織だけで集めず、いろんな窓口、京都地域創造基金を通じて集めたりしています。

### 《まずは「まなざし」をかえることから》

最後になりますが、眼差しを変えていくことをやっていかないといけないと思っています。さっき言いましたが、子どもは親や先生からしつけや教育、指導をずっと受けてきています。怒られると子どもは思ってるかもしれません。皆さんもそうですが、大人になるまでってどんな大人に会いましたか。結構今の子どもたち、もしくは今の若者たちは0歳から保育所に入ります。言葉を覚えた時には「先生」って言葉を保育所で使ってますよね。会う大人ってずっと先生なんですよ。子どもが大人になるまで長時間関わる大人ってほとんどが先生か親です。

親の役目のひとつはしつけです。先生の仕事は教育です。伝えていく、教えていく事、させる事って増えていく訳です。だから言葉掛けが、指導的なんです。大人が子どもに関わる関わり方が、そういうもんだとみんながどんどん体に染みこませていきます。結果、地域の人たち、家の人でもなく、学校の先生でもない大人まで同じような声掛けをするんです。「挨拶しなさい」とか。挨拶しなさいって言わんでも挨拶しとったらいいんです。地域の人たち、みんながみんな楽しそうに、大人が。見えています、子どもたち。そんな目を少しずつ変えていかねばいけない、姿勢を変えていかないといけないと思っています。

だいたい高校に100人入学したらキャリア、人生が変わります。60人はストレートにいきません。6割は道を変えます。そういう社会です。早くつまずけばつまずくほど、地域が目、社会が厳しかったりします。「なんで昼間やのに高校生こんなところでフラフラしてるねん」、「学校行かなあかんやん」と言う目で見えています。しかし、こういうまなざし

は、ある意味、先生や家族が十分言ってることかもしれません。ですから、地域としては「まあ、たまには休憩してるんやろな」と思いつつ、みんなが楽しい声掛けをしてやるのが大事かなと思います。そういったことがひとつ孤立を解消していくことになると思います。

貧しさの中で、貧困って貧乏だけではなくて孤立している事、困難を解決していくための方法と繋がれていない事が大きな問題ですので、繋がりを作っていく、これは地域の人たちがちょっと一歩を踏み出してくれるだけで変わるんじゃないかと思っています。子どもの貧困は、日本の将来の姿でございます。今、是非変えていただければと思います。地域ぐるみで貧困とひとりぼっちのないまちを作っていただけたらなと思います。

ご清聴ありがとうございました。

(拍手)

(司会)

村井琢哉様、長時間のご講演ありがとうございました。時間の関係上質疑応答の時間は取れません。ただ本日配布の冊子の中にアンケート用紙が入っていると思います。質問、感想等書いていただきますようよろしくお願いいたします。

「山科醍醐子どものひろば」の取り組みについて豊富な貴重なお話を伺わせていただきました。また、最後にご示唆いただきました、子どものことを考えれば悠長なことをいってられない緊急性にも気付くということ、今の子どもたちを支えるのは地域の未来を作る、未来へのバトンであるということ、それから誰がどのようにこだわることよりも子どもの困った時に解決にこだわる。そのようなことを含めて眼差しを変えていくことを学校関係者として特に感銘を致しました。今後私たちのとりくみに役立たせていただきたいと思えます。

それではみなさま、お礼の気持ちを込めて今一度盛大な拍手をよろしくお願いいたします。

(拍手)

## 財団からのお知らせ

### 2014年度の後期事業と経費等に関して、12月理事会・臨時評議員会が開催される。

さる、12月6日(土)市民交流センターすみよし北において午後2時から理事会、21日(日)午後2時から臨時評議員会がそれぞれ開かれました。

今回の理事会、評議員会では2014年度事業中間報告(4月～11月)、2014年度中間決算報告(4月～9月)、新センター建設にむけた進捗状況についての報告と説明が行なわれました。

協議事項に関しては①2014年度後期事業、②後期事業に伴う経費(新センターの登記費用、設計に伴う費用)、③今後の財団の資金運用について提案され、そのことについての質問、意見が活発に出されました。

なお、それぞれの理事会、評議員会とも、提案事項に関しては出席者の全員が異議なく承認されることになりました。

### 2015年住吉地区新年互礼会の報告

さる、1月14日(水)午後6時半より道頓堀ホテルにおいて「2015年住吉地区新年互礼会」が開催されました。府議会議員、市議会議員、住吉区・住之江区行政関係の方々、住吉連合地域活動協議会の方々、住吉・住之江区内の関係団体の方々、住吉・住之江区内の学校・PTA関係の方々、住吉地区内関係団体の方々より、84名に及ぶ大勢のみなさまにご参加いただきました。

はじめに、主催者を代表して(公財)住吉隣保事業推進協会の友永健三理事長よりあいさつがありました。今年は様々な意味で節目の年であり、日本におけるアジア・太平洋戦争での敗戦70年、部落問題での内閣同和対策審議会答申50年、「部落地名総鑑」差別事件発覚40年、国連・人種差別撤廃条約に日本が加入して20年等の重要な年であり、改めて部

落問題の根本的な解決が求められていることが提起されました。そして住吉地区においては、市民交流センターすみよし北の耐震補強の早急な実施と2016年4月以降の存続のめどをつけることと寿湯跡地での「新センター」(仮称)建設を実現していく決意が述べられました。(詳細は『あいさつ文』をご参照ください)

つづいて、高橋住之江区長より来賓のごあいさつをいただき、府議会議員(中野、中村議員)、市議会議員(高山、多賀谷、河崎、伊藤議員)のみなさまより一言ずつごあいさつをいただいたあと、鏡割りが行われ、住吉連合地域活動協議会の山本会長の発声で乾杯が行われました。(都合により途中で参加された半田府議、稲葉民主党住吉区市政対策委員長、鈴木民主党住之江区府政対策委員長からも一言ごあいさつをいただきました。)

その後、カラオケを交えた和やかな懇談があり、最後に部落解放同盟大阪府連合会住吉支部の友永健吾支部長より、「支部長に就任してまだ一年目ですが、大阪市政ならび地域における状況は大変厳しいものがあります。ぜひとも皆様の温かいご支援とご協力が必要です。部落差別の根本的な解決と格差の解消ならびに新センター建設を柱とした“人権のまちづくり”に皆さまと共に邁進して行きたいと思っています。」とのあいさつで閉会しました。

#### 写真を入れる

### 2015年 新春のごあいさつ

厳しい寒さが続いています。皆様におかれましてはお健やかに良き新春をお迎えになったことと存じます。

何かとお忙しい中にも関わりませず、新年互礼会にご参加頂きましたことに対し、衷心より御礼申し上げます。

さて、新しく迎えました本年は、様々な意味で節目の年にあたっています。

世界にとりましては第2次世界大戦終結70年、日本にとりましてはアジア・太平洋

戦争での敗戦70年の年にあたります。世界と日本の現状をみましたときに、この機会に改めて平和と人権を守っていくことの大切さをかみしめてみる必要があると思います。

部落問題解決にとりましても、今年は大きな節目の年にあたっています。それまでの部落責任論を排し、「同和問題（部落問題）の早急な解決の責務は国にあり、同時に国民的課題である」ことを明らかにした内閣同和对策審議会答申が出されて50年の年にあたります。また、全国5300ヶ所にも及ぶ部落（住吉地区を含む）の名前、所在地等を都府県別に編集し、一冊の本にして200社を超す企業等に販売していた「部落地名総鑑」差別事件が発覚して40年の年でもあります。さらに、部落差別、在日コリアンに対する差別等の撤廃に役立つ国連・人種差別撤廃条約に日本が加入して20年の年にあたります。

この年に、これまでの取り組みによって改善されてきたこと、残されている課題、新しく生じてきている問題等を明らかにし、改めて部落問題の根本的な解決の方向を見定めていくことが求められていると思います。

住吉地区にとりましても、今年は大きな分かれ目の年です。いろいろな課題がありますが、2点に絞って申し上げたいと思います。

1点目は、市民交流センターすみよし北の耐震補強を早急に実施し、2016年4月以降も存続される展望を切り開くことが必要だという点です。この点は、南海トラフ巨大地震がいつ生じてもおかしくないと言われている状況下で、避難場所を確保するという差し迫った課題です。また、年間5万5000人（推計）にも及ぶ市民が交流と生きがいの活動場所として活用されている「場」を確保していくという課題でもあります。

2点目は、寿湯の跡地に「新センター」（仮称）を建設していく課題です。具体的には、本年4月頃までには実施設計を終え、遅くとも7月には着工し、来年（2016年）4月にはオープンできるようにしたいと考えています。

この「新センター」は、①住民の支え合いによる自主活動の拠点、②相談の拠点、③自立支援の拠点（子どもの勉強会や各種研修会等）、④交流の拠点、⑤図書・資料（部落問題や住吉地区に関する図書・資料）の拠点、

としての機能を持ったセンターにしたいと考えています。

さらに、小規模多機能デイサービスのサテライト（出先）や訪問看護ステーションと居宅介護支援事業所にも、新センターに入ってもらおう予定となっています。

さて、本年4月12日は、大阪市会、大阪府会議員をはじめとした統一自治体選挙がありますし、5月17日には「大阪都構想」に関する住民投票（大阪市を解体し5つの特別区に分割する構想）が行われることとなっています。さらには、12月までに大阪府知事、大阪市長選挙が行われることとなっています。これらは、いずれも大阪市に暮らす私たちにとって極めて大きな影響を与える選択の機会です。

この選択をするにあたって、私は、部落差別をはじめとした差別の撤廃、社会的に最も弱い立場に置かれている人びとにとってどうなのかを、判断の基準に据えて行きたいと思っています。

昨年10月、私は韓国光州広域市と晋州市にあります国立慶尚大学に招かれ、「住吉部落の歴史と人権のまちづくり」について報告をしてきました。なぜ招かれたかといいますと、実は韓国も人びとの生活を豊かにするために自治体が果たす役割が見直され、人権のまちづくりの必要性が認識され始めているからです。

2か所での報告は大いに注目され、今後の取り組みの参考にしたいと言われました。この事例からもわかりますように、住吉地区における人権のまちづくりは、国際的にも注目され、評価されているのだということを強調させていただきたいと思います。

哲学に弁証法というものの考え方がありますが、物事の発展は「テーゼ（正）」→「アンチテーゼ（反）」→「ジンテーゼ（合）」という過程をたどるとされています。住吉におけるまちづくりの歴史を振り返った時、最初の段階は、行政の補助はなく地元住民の力で行われました（例えば青年湯の建設）。戦後、同和对策審議会答申が出されて以降、住吉地区における本格的なまちづくりが進められていきますが基本的には行政の補助金で実施されました。これから、新たなまちづくり

を本格的に始めていくこととなりますが、地元の力と大阪市をはじめとした行政の力とを結合していくことが求められていくと思われ  
ます。

本年を、このような新たなまちづくりが本格的に開始される年としたいということをお誓い申し上げまして、新年互礼会でのごあいさつと致します。

2015年1月14日  
公益財団法人住吉隣保事業推進協会  
理事長 友永 健三

【注】1915年から、今年までの100年を10年刻みに振り返って、世界と日本、住吉地区の出来事をまとめた資料を作ってみました。ご参照ください。

## 「財団へのご寄付へのお礼」

公益財団法人住吉隣保事業推進協会の活動は、皆様方からのご寄付によって支えられています。2014年12月以降、以下の団体からご寄付を頂いています。この紙面をお借りしてお礼申し上げます。

・医療法人ハートフリーやすらぎ(住吉診療所)  
金額100万円

[お願い]

引き続き、皆様のご寄付をお願いいたします。尚、ご寄付を頂きました方には免税の制度があります。詳しくは、財団事務局までお問い合わせください。  
電話:06-6674-3732

ホームページアドレス

<http://sumiyoshi.or.jp>

\*2014年度から「すみりんニュース」は、2ヶ月に1回、奇数月に発行致します。